

対談・『国境の南、太陽の西』 (III)
(重近啓樹先生追悼記念号)

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 酒井, 英行, 高野, 圭子 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.14945/00007063 |

対談・『国境の南、太陽の西』(Ⅲ)

酒井 英行
高野 圭子

Ⅲ 記憶／物語の中の女——イズミ

酒井 この『国境の南、太陽の西』という作品は、どの時点が語りの現在か、〈今〉がいつなのか、がわかりにくい作品なんですけど。作品の結末が語りの現在なのか、……、結末からしばらく時間が経過した時点が〈今〉なのか、……。

漱石の『こころ』なんかでも、作品の結末の時間、物語の中の時間の終結点から、しばらく時間が経過した時点が、回想の語りの現在ですけども。『国境の南、太陽の西』は、作品の最後の局面、誰かがそっと「僕」の背中に手を置いた、っていうところが、〈今〉なのか、っていうのが、ちょっとわかりにくい作品ですね。リアルタイムの語りで、小学校のとき、中学生のとき、と順次に語っていることとは明白なのですが、高校時代のイズミとの付き合いを語るときにも、〈今〉と〈そのとき〉が混在しています。しかし、これは語りの混乱ではなく、春樹の意図的な

語りだと思えます。「女の子のスカートの下に手を入れることしか頭がない」「がさつな」男の子であった「僕」が、イズミに対して発動する性欲に翻弄される様を、すべて三十七歳の時点から回想したのでは、その「がさつな」男の子の混乱ぶりは表現できませんね。ですから、春樹はリアルタイムで、イズミとの関わりを語る語りを取り入れているのだと思います。しかし、この作品は、基本的には、回想の語り、作品の結末の時間、あるいは、そこからしばらく経った時間からの回想として読むべきですね。「女の子のスカートの下に手を入れる以外のことだつて少しは考えられる」「僕」、つまり、性欲に翻弄される時期を一応通り過ぎた「僕」によるイズミの回想であるはずですね。しかし、イズミを回想する語りの肝心要のところ、「僕」の成熟が見られるかと言えば、それは見られませんね。例えば、「僕」が、一度だけ、裸のイズミを抱いた日のことを語る語りの中で、イズミが帰り支度をしかけたとき、叔母さんがいきなり来て、イズミがすごく慌てちゃって、……。

高野 はい。

酒井 そのとき、イズミは、こういうのつてもう嫌、と言い、混乱し、腹を立てていたのですが、その時のことを回想する「僕」は、間違いなく、僕らは幸せだったのだ、みたいなことを言っていますんでしたかね？

高野 「でも今日は本当に素敵な一日だったよ。」っていうところでしょうか？

酒井 いや、回想の箇所で……、イズミをそれほどまでに窮地に陥れておきながら「僕はイズミと一年ちよつとつきあつたけれど、その日曜日の午後は間違いない僕らが二人で一緒に過ごしたいちばん幸せな時間だった。」と回想しているところ、イズミの側を思いやる想像力が抜け落ちている、「僕」の独り善がりの思いでしかなく、三十七歳の「僕」の判断だとすると、お粗末ですね。

高野 ええ。

酒井 イズミが、どれほど混乱し、傷ついているか、ということ想像する思慮に欠けていて、イズミの身体によって、十七歳の男の子の性欲が充たされたことに自己陶醉している語りですね。「僕は十七で、健康で、大人になろうとしていた」と、裸のイズミを抱いたことを、健康な男の子の自然な行為と捉え、自己満足していますね。

高野 まあ、男性が、高校時代のガールフレンドのことを、思い出すときに、ありがちだと思っんですけど、一つの武勇伝のように、……

酒井 うん（笑い）、武勇伝ね（笑い）。

高野 武勇伝っていうか、……（笑い）。

酒井 まあ、そうでしょうね、はい。

高野 まあ、「僕」の青春の、一つのエピソードとして、イズミのことを語っているわけですよ。そして、それを、「僕」とイズミにとつて、っていうふうには、女性も、自分と一緒に括って、言ってしまうっていうのが、無邪気というか、傲慢というか、……。イズミの気持なんか、まったく気づかってもいないし、考えてもいないのに、始は、「僕らは、」って言うてしまう。そういう、自己中心的というか、男性中心的ところか、そういうところも、リアルだなんて、思えます。この小説の、おもしろいところなんじゃないでしょうか、こういう場面が。

酒井 始は、ぬけぬけと、こういうことも言っているんですね。これは、女性である高野さんに、聞いてみたいところなんです。イズミと、初めて裸で抱き合った時のことを語る語りの中で、具体的にイズミの下着に言及しているのですね、……。「彼女は淡いブルーの小さなパンティーをはいていた。そしてそれとお揃いのブラをつけていた。彼女はそのときのためにわざわざ自分で買ってきたのだろう。それまでは彼女は普通の母親が高校生の娘に買って与えるような下着を着ていたからだ。」って言うていて。イズミの側に立って考えてみて、初めて下着まで脱いで、始と肌を触

れあうときの、まあ、勝負下着というのか、……

高野 はい（笑い）。

酒井

始は、それまでと異なる、女の子らしいイズミの下着をすごく無邪気に語っていると思うんだけど。イズミの側、こういう女の子らしい下着を買って、身につけてきたその思いを考えると、始が男目線で、その下着を身につけたイズミの可愛らしさを無邪気に語るその思いにはズレがあるのでは……。 「性欲と好奇心で頭がいっぱいになった」 始に、「もう服の上から君を抱くのはいやだ」、「セックスをしたくないのならしなくてもいい。でも僕はどうしても君の裸を見てみたいし、何もつけていない君を抱きたいのだと言った。僕にはそうすることが必要だし、これ以上我慢することは不可能だ、と」言われたイズミに性的自由はあったのか？ 私は男だから、こういう状況に置かれた高校生の女の子の心理は、よくわからないのですが……。

高野

イズミも、あの、始の母親と父親が、その日はいないということ、承知で、始の家に来ているわけですから。そこで、始と自分が、二人きりになるっていうことは、もちろんわかっていたと思います。ですから、そういう、……、下着を見られるというか、脱がされるというか、そういう状態になるっていうことは、想定していたと思います。

酒井

それは、覚悟してきていますよね。

高野

はい、そうなるかも、と想像してはいると思います。それを、まあ、始くんしたら、合意であるっていうふうに（笑い）、了解するんでしょうけども。男からしたら、そういうことになるんでしょうね、きつと。ですが、それが、合意かっていうと、それは違うだろうって、私は思います。かわいい、まあ、ちよつとセクシーな下着を、男の子に見られるかもしれないからって、つけてくる、女の子の気持とは、やっぱり、違いがあると思います。

酒井 うん。

高野 無理やりか合意か、っていう線引きが、これは、よく話題にもなることですが、男／女では、違うということですよ。あ、あの、ロマンチックな気分とか、……、たとえば、見られる可能性があるから、綺麗なものを身につけたいとか、そういう下着を選ぶっていう、女の子の思いを、性欲であるところさえれば、確かにそうかもしれないけど、男の子のそれとは、違うのではないかと、思うんです、……。あの、下着を見られるかもしれない、ということから、その先に、体を求められるかも、と想像しているかもしれない。でも、その段階で、OKだと、GOサインを出しているわけではないと思います。なんていうか、そういう状況になるかもしれないと、考えるときに、それは、愛し合うとか、そういうロマンティックな想像でしかなくて。男と二人きりになることを承知していた、ということが、

女性の側からの、SEXの合意のサインであると考えるのは、男性側からの認識でしかないんじゃないでしょうか。

酒井 イズミは、始を好きだった、っていう設定になっているわけだから、好きな男の子の前で、可愛い女の子であるうとする努力をしているっていうことですか、この下着の選択は、……

高野 見られるだろうっていうことが、……。あの、すでに、母親が買って来たような下着を着ていたとあって、みもふたもないことを言われているので、……

酒井 ああ（笑い）。

高野 男の子からしたら、何を着ていたって、脱がせちゃえば一緒っていうことなんでしようけど（笑い）。やっぱり、 Teenエイジャーの女の子ですから、好きな男の子に、ちょっと大人っぽくみせたいとか、セクシーに見せたいとかっていう、意識が働いたのかもしれないし。もちろん、女の子側にも、性的な、好奇心とか、欲望も、あったとは思いますが、ただ、そのレベルが違うというか、……。

酒井 始の語りで隠蔽されていることを想像すると、この日、両親が、親戚の法事に行っていて、午後ずっと帰ってこな

いから、お出でよと言われて、始の家に来たわけだから、拉致されたわけでもなければ、監禁されたわけでもないのだから、合意だけど。

高野 はい。

酒井 この日のことは合意のように見えますが、しかし、そこに至るプロセスには、合意とは言えない、イズミの性的自由を奪う始の強迫があると思います。この日、始の家に行かないと言ったら、嫌いになれる、あるいは、じゃあ、君とは別れよう、と言われることはありえるわけで。

高野 はい、そうですね。

酒井 好きな男の子に、強迫されているようなものだというのは、裸の君を見たい、抱きたい、もうこれ以上我慢できない、と言われたのですからね。

高野 すごい言い方ですね。

酒井 さっきの、『ダンス・ダンス・ダンス』の主人公が、男の性欲を、鳥が空を飛ぶようなものだったって、言うのと、まあ、似ていて、『僕にはそうすることが必要だし、これ以上我慢することは不可能だ』という言い方をされると、始くんのが好きな、高校生だったイズミは、やっぱり、これを拒否するっていうことは、かなり難しいことで、日曜日の午後、裸で抱き合ったのは、合意って言えば合意だけど、……

高野 ええ。でも、その前段階では、あきらかに強迫しています。

酒井 強迫ですよ。

高野 もし、できないなら、嫌いになっちゃうよって、はっきり言っていますし、……

酒井 うん、はっきり言っているようなものですからね。我慢することは不可能だって言われると、断ったら、どうなっ

ちやうのか、イズミは悩みますよね、……

高野 ここで、始は、すぐく理屈っぽい言いかたをしています。そうすることが必要だとか、我慢することは不可能だとかって、言い方していますよね。理由付けというか。でも、その前の段落のところ、**「僕はもちろん性欲と好奇心で頭がいっぱいになった十七か十八の無分別な少年に過ぎなかった。」**って、書いている。まあ、これは、三十六か七の、回想で書いたんだと思うんですけど。

酒井 はい。

高野 性欲と好奇心で頭がいっぱいな無分別な少年っていうことであれば、それはもう、こじつけの言い訳みたいな、必要だったとかも不可能だとかも、へったくれもないわけで（笑い）。だったら、ただやりたいだけだって、言えбайいのに。最後まではやらないから、とりあえず裸見せてよ、とか、……。そういう、エロエロで頭がいっぱいな、頭の悪そうな発言が、ぴったりくる状況だったと思うんですよね、このときは。

酒井 それは、だから、ごまかしですね。

高野 ええ、そうだと思います。

酒井 イズミの身体への接近が強引で、次から次へと、ハードルを高くして、圧力をかけていきますよね。

高野 はい。

酒井 始は、自分の部屋で、初めて、イズミ抱き寄せてキスをしようとして、イズミが怒ったら、幾通りもの言い訳を考えていたけど、イズミは断らなかつたって言って。

高野 ええ。

酒井 初めてキスしたとき、「女の子がキスをさせてくれるなんて、ほとんど信じられないことだった。」と言いますね。愛

情の相互交換というよりも、男の性的欲望をイズミの身体を通して充たすものとして、キスを捉えていることがわかる言い回しですね。イズミの身体への接近の最初のハードルが、キスすることだったわけであり、それが叶った時、もう、心臓がばくばくするようで。そこを通過できたら、次は、裸で抱き合うっていう、……

高野　　だんだん、だんだん、先に進んで行って（笑い）。

酒井　裸で抱き合うことを承諾した後で、イズミは、始の本当の欲望（性交すること）がよくわかっているのに、それを回避するために、釘を刺しておきますね。『でも約束してね』と彼女は生真面目な顔で言った。『それだけよ。私がやりたくないことはやらないでね』と。最後までいくのは嫌だと、言葉にして、意思表示しています。

高野　　はい。

酒井　性交の前段階として、裸で抱き合うことが、当面の欲望であるわけですから、イズミの意思表示を受け入れて、「何もつけないない彼女の体を抱いて、その首や乳房にキスをし」ていくわけですが、そこに留まることは難しいのですね。「僕は彼女の中に入りたくて、気が狂いそうだった」と、本当の欲望をむき出しにします。イズミを大切にするという愛情関係からずり落ちていきますね。「性欲と好奇心で頭がいっぱいになった」男の子として、イズミの思いを無視して、性交に行き着こう、行き着こうとしています。

高野　　はい。

酒井　裸のイズミを抱いた後の始に、春樹は、「僕は十七で、健康で、大人になろうとしていた」と言わせていますが、それは、『ダンス・ダンス・ダンス』で、男のセックスを、鳥が空を飛ぶような自然現象として捉えている春樹ですから、「当然な書き方でしょうね。「健康で、大人になろう」としている男の子が、女の子の身体を通して、精液を放出するのは、黒雲が出れば、雨が降るみたいな自然現象と考えているのでしょうか？　その思考には、女性の側の心、レディ

ネスが完全に無視されていますよね。ですから、「中に入りたくて、気が狂いそうだった」始を、「しつかりと押し止めた」イズミに、「ごめんね」と言わせているのですね。

高野 そうなんですよね。

酒井 自分の意に反することを、始がしようとしているのを、拒むのに、「ごめんね」と謝るっていうのは……。男／女の関係は、やっぱり、対等じゃない、支配／被支配の上下関係があるっていうことを、イズミ自身が内面化していますね。始の欲望に本当は応じるべきなのに、応じられない私が悪いのだから、謝るしかないっていう、抑圧された受動的な女の子としてイズミは描かれていますね。

高野 はい。始の性欲を受け入れれない自分を、イズミは、謝っているわけです。自分が悪いと。受け入れられない自分が悪いって、彼女自身が思っている。だから、あなたを拒んだ私を、嫌いにならないでと、懇願するわけです。そして、嫌われたくないから、身体を開く代わりに、口でやってあげましょう、みたいなことまで言うわけですからね。商売女みたいですよ、ここは。

酒井 そこは、だから、いくらなんでも。「素直な温かさ」がある「可愛い」イズミが、……

高野 ええ。

酒井 高校二年生の普通の女の子によるこの展開っていうのは、いくらなんでも、不自然ですよ。性交しようとする始を押し止めて、「ごめんね」と謝り、……

高野 その代わりって。

酒井 そう。その代わりに彼女は、始のペニスを口に含んで、舌を動かしてくれた、って。こういう女の子がいたら、……、これは、なんか、風俗に行っているみたいじゃないですか、まるで。

高野 さっき言ったように、女性を蔑視しているみたいに感じるっていうのは、こういうところだと思っんですね。女っていうものは、こういうものだって、春樹は、……、私は、わざと、意識して書いていると、思っんですけど。

酒井 うん？ その、こういうものだっていうのは？

高野 女性を、性的に男性に奉仕する存在として、……

酒井 男性のインサートを拒むのなら、男性の性器を口に含むくらいのはすべきだって？

高野 すべきっていうか、あの、女性の娼婦性とかって言う言説があるように、……。

酒井 ああ。でも、高校二年生の女の子ですよ。「斧を放り込んだら妖精が出てきそうな」名前が付与されていて、店にやっつて来た高校時代の同級生も言うように、「性格もいいし、キュート」なイズミですよ。

高野 はい。

酒井 すごく、純粋な、メルヘンふうな女の子に設定していて。

高野 そうですね。歯医者さんのお家のお嬢様で。

酒井 そのお嬢様がね、ペニスを口に含んで、舌を動かし、射精に導くというの、……

高野 私は、この場面は、最後の島本さんの場面に繋がっているんじゃないかって思っんですけど。

酒井 ここが、あの、箱根の？

高野 ええ。

酒井 あの、箱根の、例の……

高野 はい。あの、島本さんが、「僕」の身体を全部舐めるっていう（笑い）、濡れ場というか、……

酒井 ああ。

高野 女は、たとえ十七だろうと何だろうと、男のために、もしくは、男に愛されるために、身体を用いるものだと、男は思っている。もしくは、思いたい。清纯そうでも、一皮むけば、女はみんな、男に快楽を提供してくれるものだから、……。だから、それを、嫌だつていうのは、女が気取つているとか、嘘をついているとか、……。男性は、こんなふうに、都合よく女性像を、どんどん勝手に、描いていけるんだと思うんです。ここで、イズミが、処女は守りたいけど、そのためなら、他のことはやってあげる、つていうのは、あの、男性が求める女性像、……。処女がいいけど、性欲も満たしたいつていうような、そういう女性像を、具現化しているように思えます。そうすることが、この世、男／女の世界で、生きていく術だと、そういう価値観が、まさに、男にも女にも、内面化されているということ、表しているのではないのでしょうか。男が、女に、処女性も求めるけど、娼婦性も求める。そのような、男性の欲望を基準にした、男／女関係が、まかり通る構造、力関係、権力構造が、現実の社会であつて、その中で、女性の姿を、ここでは描いているのだと、私は思います。

酒井 高野さんの話を聞いていて、春樹の『我らの時代のフォークロア』という短編を思い出したのですが。

高野 はい、はい。

酒井 現在のイズミの姿を先に伝えた高校時代の友人を、優等生タイプとして描いていたけれど、『我らの時代のフォークロア』の主人公も優等生タイプで、そのガールフレンドもまた優等生タイプであり、彼と彼女を春樹は、「ミスター・クリーン」と「ミス・クリーン」つて呼んでいます。

高野 ああ、はい。

酒井 まさに優等生同士の、男／女の高校生を描いていて。

高野 そうでしたね。

酒井 始は優等生タイプではないのですが、始とイズミの関係性は、「ミスター・クリーン」と「ミス・クリーン」の関係性と重なるところがあつて、……。『我らの時代のフォークロア』の二人は、どちらかの家で、毎週、ペッティングをするようになるのですが、服を脱がないことをルールとして守っていたのですね。貪るように激しく服を着たまま抱き合った後は、二人で一緒に勉強をして、……。

高野 ええ。

酒井 非常に変なつて言えば変なカップルで、私には不健全なものが感じられるんだけども。

高野 はい、

酒井 「ミスター・クリーン」のほうは、始と同様に、「ミス・クリーン」と、「本物のセックス」を強く要求するのですが、「ミス・クリーン」のほうは、結婚するまでは処女でいたいから、つていう理由から、彼の要求を受け入れなかったわけです。

高野 ええ。

酒井 処女性を大切にする点において、イズミと「ミス・クリーン」はその時代の高校生としては平均的なのでしょうが、『我らの時代のフォークロア』の面白さは、「ミス・クリーン」が結婚するまで処女でいることに過剰に拘るのに、結婚したらもう処女である必要はないので、結婚した後でなら、「ミスター・クリーン」と寝ると約束し、実際に、誘うところですよ。『ミス・クリーン』が、処女性というものを、すごく、物理的にというか、自堕落にというか、……

高野 そうですね、計算づくですよ。

酒井 結婚したら、もう、処女性に拘る必要がないから、あなたと寝るわ、と約束して、実際にその約束を果たそうとするのは、「ミス・クリーン」らしからぬふしだらな生き方ですね。結婚するまで処女性を守るという性規範に囚われて

いた彼女が、夫婦関係における倫理性を置き去りにしているのですから。

高野 はい。

酒井 その設定、強固に処女性に拘るような設定が、イズミと、……

高野 繋がると思います。

酒井 似ていますよね。イズミが、始のセックスをしたい、という強い欲望を、なぜ拒んだかと言えば、始が東京の大学に行こうとしていたからだと、始は解釈していますね。地元の大学に行くイズミにすれば、東京に行った始がやがて他の女の子を好きになることがわかっていたから、始と結婚することはない、だから彼とは寝ない、とイズミは考えている、と始は解釈しているのですね。

高野 ここで、イズミは、私たち、これからどうなるの？ っていうふうに、言いますよね。それは、女の子のほうに、特に、高校生という若さでは、あの、性的な関係をもつときには、先のこと、二人の将来のことを、考えてしまうんだけど、男の子のほうは、始くんは、セックスする、寝るっていうことに、将来のこと、たとえば、結婚とか、家庭とか、くつついてくるなんて、まったく、考えていなくて。

酒井 うん、うん。

高野 性欲と好奇心で、頭がいっぱいで。ただ、目の前の、女の身体を見たい、脱がせたい、触りたいっていうだけなんですよね。しかも、大学は、東京の大学へ行きたい。それは、イズミとか、女の子、性欲とかとは、ぜんぜん無関係で、いわゆる、男性ジェンダー、男性共同体の中で、その一員として、時代の価値観とか、熱とかに、共感して、自分もそこへ行きたい、混ざりたいっていう思いだけがある。それは、イズミの思いとか、イズミとの関係とは、何の関係もないから、ただ、イズミの、私たち、これからどうなるの？ っていう追及をかわすために、外国へ行くわ

けじゃない、とか、わけのわからない言い訳をして。

酒井

何時間かあれば帰れるんだから、東京へ行ったからって関係が終るわけではないんだから、っていうような言い方をするけどもね、セックスを受け入れさせるために、……

高野

イズミの言っていることと、まったくかみ合っていないですね。イズミが、思っていること、不安に感じていることとは、まったく食い違っている。ここでも、ジェンダー差異が、はっきり描かれていると思います。

酒井

うん。

高野

こういうところは、すごく、リアルだなって。

酒井

春樹の作品には、どうしてこんなにセックス場面が多いのかって、不快に感じる人がいるっていうことを聞くことがありますね。『ノルウェイの森』の主要人物の多くは、大学生ですが、今話しているイズミと始は高校生ですからね。『ノルウェイの森』では、大学時代の緑とワタナベ、直子とワタナベを書くんですけど。それでも、たとえば、緑と雨の降る高島屋の屋上で抱き合った後、緑の部屋へ行き、ベッドで抱き合うのですが、緑が手で射精に導くだけです。その後、青豆のごはんを作ってくれて、「沢山食べていっばい精液を作るのよ」、「そしたら私がやさしく出してあげるから」って言って、その場面は終わりです。直子の二十歳の誕生日の夜のワタナベと直子とのセックスは描かれていますね、阿美寮を訪ねて、草原で抱き合ったときには、「やってほしい」、「いいわよ」というやり取りの後、直子が手で射精に導きますね。ところが、『国境の南、太陽の西』では、「ごめんね」と言って、始の欲求を押し止めた後の、高野生のイズミの振る舞いが娯婦的で……。だから、さっき高野さが言ったように、このイズミと箱根の別荘での島本さんとが繋がっているというのは頷けますね。高校三年生のイズミが三十七歳になったのが、箱根の別荘の場面と考

えると、島本さんの過激な性愛行為も納得できます。この場面の性愛行為は、教室で、声に出して読めないような描写ですね。

高野 はい。

酒井 イズミと島本さんは、ルビンの盃のように、一人の女性がイズミに見えたり、島本さんに見えたりしているだけで、結局、一人の女性である、そう考えると、高校生のイズミの娼婦的振る舞いもわかりますね。

高野 はい。さっきの、『ノルウェイの森』を、先生が例に出されたんですけど、直子とキズキが、兄妹のように育って、で、お互い、性欲を、……、なんて言っていたんですけど？ 何でもしてあげたとか、……

酒井 彼がして欲しいことは、何でもしてあげた、って……

高野 はい。それが、子どものときからって、確か、……

酒井 そうだね、十二歳のときにキスして、……

高野 子どものころから、お互い、身体を触り合っていたとかって。本当に、春樹は、あの、なんて言うんですかね、ちょっと、あの、……、思わず眉をしかめたくなるというか、……。そういうことを書くんですけど、この作品でも、

高校生のイズミに、あれだけのことをさせて。まあ、実際に、こういうことは起こらないにしても、未成熟な男女の内面というか、身体の奥にある、肉欲というか劣情みたいなものを、文章化するんですよ。だから、読む側が、なんだかむずむずする或者说うか、嫌だって感じる人もいれば、そういうのを刺激と感じて喜ぶ人もいると思うんですけど。男／女という、ジェンダー間に生じる、あの、二つしかないジェンダー、異性の間に、必ず生まれる、性的な眼差し、欲望というものは、それは、すごく幼い頃から、存在しているということ……。それは、島本さんのエピソードにも通じると思うんですけど、春樹は、それを、ちゃんと書いていて、この作品でも、強く感じました。あの、

異性愛には、セクシュアルというものが、必ず付きまとうがゆえに、そこに、権力関係、構造が生じて、そして、それは、人間の社会全体の構造の、基盤であり、それを規定していると、言われています。それを、春樹も、書こうとしているんじゃないでしょうか。だから、意図的に、若い男／女の、性的な行為なんかを、書く。それによって、そのような、人間社会の現実を描いているんだらうと、私には、思えます。

酒井

さっきの話にもう一度戻るけど、始が初めてキスしたときの表現がね、ちよつと、気になるのですが……。対等な男／女の、相手を好きという気持ちと相互に伝え合うものとして、キスという行為があると思うのですが、始は初めてイズミとキスした後で、「女の子がキスをさせてくれるなんて、ほとんど信じられないことだった」と言っています。キスという行為を先のような相互行為と捉えていれば、このような言い方はしなくてはダメですね。キスしたいという性的欲求を男だけが持っていて、その欲求を女の子（の身体）を通して放出させる行為と捉えているから、あのような言い方になるのではないのでしょうか。「女の子がくさせてくれる」という捉え方が気になります。男の性欲の放出手段として女の身体がある、という考え方。例えばね変な話をするようですが、恋人関係にある男女が、ホテルに行つてセックスしました、そのホテル代を男が払うよつて言い、女もそれを当然だと思つて自分は払わない、というケース。そこには男女間に経済格差があるからそうなるという面はあるでしょうが、しかし、それだけではないと思います。セックスしたいという性的欲求が男にだけあり、女がさせてくれたんだから、男がホテル代を払う、という考え方。対等な相互行為とは言えない性愛関係がありますね。

高野

はい。

酒井

それは経済格差だけの問題ではないと私は思います。

高野

そうですね。

酒井 恋愛関係にある男女が、ホテルに行って、性行為をしました、それは、フィフティー・フィフティーの対等な関係であるべきなのに……

高野 はい。

酒井 対等な関係であったかのようにセックスし、その後、ホテル代をどっちが払うかというときに、当然のごとく男が払い、女は一円も払わなかったとしたら、それは対等な恋愛関係ではなかったのではないでしょうか？ 男は、女の子がさせてくれたんだから、男が払うべきだと思います、女は、させてあげたのだから、男が払うのが当然だと思う、こういう関係は変だと思います。

高野 ええ。

酒井 春樹には、そういう問題を主題化した作品があります。『回転木馬のデッド・ヒート』という私の好きな短編集がありますが、その中に、「雨やどり」という作品が収録されています。そこで春樹は、「最近ある小説を読んで、金を払って女と性交しないというのはまっとうな男の条件のひとつであるという文章にであった。こういうのを読むと、なるほどな、と思う。」「個人的な話をする、僕も金を払って女と性交しない。したこともないし、この先とくにしようにも思わない。しかしこれは信念の問題ではなく、いわば趣味の問題である。」、だから、金を払って女と寝る男を「まっとうじゃない」と断言できない、というように書いています。「昔、ずっと若い頃の「僕」は、「ごく単純にセックスというものは無料だと考えていた。ある種の好意と好意（もつと違った呼び方もあるだろうが）が出会えば、そこにごく自然に、自然発火のごとくにセックスが生じるものだ」と考えている、と。「無料」に「ただ」とルビがふられているのですが、たとえば、セックスした後、男がホテル代を払った場合、それを「ただ」のセックスと言えるのか、

夫婦間のセックスを本当に「ただ」のセックスと言えるのか、という微妙な地点に立ち入って考えていると思います。

高野 はい。

酒井 「我々は多かれ少なかれみんな金を払って女を買っているのだ」という考え方は、高校時代の始の、「女の子がキス

させてくれるなんて」という考え方に通じていると思います。男女の性愛関係の非対称性と言いますか、……。

高野 そうですね。春樹が、こういう状況を語るときには、いつも、男性が主体で、女性は客体というふうに、あから

さまに書きまますよね。たとえば、女が男に、愛されたいから、身体を差し出すとか、まあ、お金が欲しいから、身体を差し出すとか。あとは、養ってもらっているから抱かれるとか。

酒井 うん。

高野 そういう、こう、権力を持っている側と、所有されるとか、扶養されるとかという、立場にある側との間に、性的な関係が介在しているのが、常に、ジェンダー、男／女の関係性なんだろうと思います。男性が、性欲を持って、それを女性に向ける、ということが、当然なこと、自然なことのように、感じるのは、そういう、男／女間の、上／下とか強／弱とかといった、非対称性が、当然のこと、自然なこととして受け入れられているからなんですよね。私たちは、そのような「世」に生きているんだ、ということ、春樹は明らかにしているのだと思います。たとえば、さつき、先生がおっしゃたように、男女が二人でホテルに行ったとき、男が、僕がホテル代を払うよ、って言ったとき、いいわよ、私も半分払うわよ、って女が言ったとしたら、……

酒井 うん。

高野 喜ぶ男がいるかって、いうことなんですけど（笑い）。まあ、中には、喜ぶ男もいるかもしれませんが、……

酒井 ああ、うん（笑い）。

高野 でも、そういうことで、そこで、はじめて、その男女の間に、当然とか自然とか、ではない、揺れみたいなものが生じて、関わりあいが、生じるんじゃないかと思うんですね。「女のくせに、……」とか、「俺のことを馬鹿にしているのか」とか。

酒井 うん。

高野 お互いがお互いを、どう思っているのか、どう感じているのかが、出てくるんじゃないかと、思うんですけど。男が払う、って言ったとき、その、男の気持を汲んでというか、その男が、気分を害さないように、というようにところまで、まあ、無意識ではありますけど、女の側が、そこまで男を受け入れているのが、現実の社会のように思えます。だから、ただ、男だけが、女の身体を、モノとして扱っている、金銭に換算できるものとして、見ているのではなく、女の方も、そういう関係性によって、社会が丸く納まっていて、うまく、回っていくっていうことを、わかっている、許しているんだと思うんですね。

酒井 さっき高野さんが言っていたように、裸で抱き合った後、イズミは、「私たちはこれからいったいどうなるの？」って言って、強い不安を顕わにしますが、始の方は、将来の二人の関係性などは念頭になく、性愛行為は性愛行為として自己完結していて、次の段階としての性交を何が何でもしたいという欲求で、気が狂いそうになっているだけですね。

高野 ええ。

酒井 イズミは、その先のが心配で……。で、春樹は、そういう複雑な人間関係の葛藤を、始に免除してあげるためなのか、イズミと裸で抱き合った二週間後に、たまたま、イズミと京都へ行って、イズミの従姉と出会わせる、というストーリーを仕組めます。しかし、それは、春樹の配慮であり、主人公の始は、裸のイズミを抱いて、イズミの中

に入りたくて、気が狂いそうになった、その性的欲求の放出先をイズミの従姉に求めたということでしょうが。この女と寝たい、この女と寝なくてはいけない、と思い、この女だって自分と寝たがっていると本能的に感じた、として、激しい性愛行為にのめり込んでいきます。これでは、イズミとの間に積み重ねてきていた性愛関係の深まりは突き崩されてしまいますね。作品（始の人生）は別のコースを辿ることになります。高校時代のイズミとの性愛関係の段階的な深まり、初めてキスするときも、イズミが怒ったときのために、何通りもの言い訳を用意して臨んで、やっと思いが叶い、……

高野 はい。

酒井 で、次の段階に進み、裸のイズミを抱くことを承諾させますが、「私がやりたくないことはやらないでね」と、性交そのものはいないって約束させられています。でも、気が狂いそうなほどの性交欲求をイズミに押し止められ、その代替行為として、イズミに口で射精に導いてもらいますね。その二週間後に、イズミの従姉と出会って、散歩もせず、話もせず、ただただ、性交していたっていう。

高野 ええ。

酒井 出会ってすぐセックスするようになり、二カ月間にわたって、他になにもせず、性交してただけで、その後の関係性にまったく言及していませんね。このようなイズミの従姉は、なんだか作品世界の現実から浮き上がった存在で、始の性幻想が呼び出した幻影ではないのかとさえ感じられます。ある意味、平凡で現実的な女の子であるイズミとセックスすると、始は現実的な問題をたくさん背負わねばなりません。イズミの従姉とのセックスは、そういう現実的な人生のハードルを越えることを免除され、何の責任を負わされることなく、性交したくて気が狂いそうという欲望を放出することを可能にするものですね。互いに愛もなく、将来の展望もなく、ただ刹那的な性交のみを

繰り返すだけ、という、真空地帯に始は入り込んでいたとしか思えません。

高野 会話も、記憶に残ってないって。しゃべったこともないって、……

酒井 イズミとの間の将来、例えば、結婚というような将来の問題を免除されたイズミの従姉との性愛関係に入り込むツルが、「吸引力」であったわけです。その「吸引力」を正当化するために、永遠の（運命の）女性である島本さんに対して感じたのが、「吸引力」の原型であった、と始は言いますね。小学生の島本さんに感じたものが、「吸引力」の原型であったというのは、それを「吸引力」と呼ぶには、小学生のときの始があまりにも未成熟であったからだというのでね。ここで始が言う「未成熟」というのは、性的に「未成熟」ということであるのは、十二歳の始が、「正確な意味での性欲というものを持たなかった」という言い方からわかると思います。永遠の女性である島本さんに感じたのと同質の「吸引力」をイズミの従姉に感じたから、セックスしたのだ、というのは、ですから、自分の性的欲望を美化するための方便に過ぎないのではないのでしょうか？

高野 はい。それは、もう、……

酒井 「吸引力」という言葉を使って、正当化しているけれども、イズミと裸で抱き合って、イズミの中に入りたいという欲求を押し止められて、より膨張して溢れ出しそうになっている性的欲求のことであり、それを放出するストーリーがイズミの従姉との関係ですね。

高野 そうです。

酒井 で、その愛も無く、将来を考えることもなく……。二カ月間にわたり性交するだけ、という関係が終わったら、初めから何にも無かったかのような関係性、これは本当に不自然で。それからほぼ二十年間の空白があり、イズミの従姉の死を知らされるわけですね。

高野 ええ。それで、イズミにばれてから、彼女とどうなったとか、イズミと彼女との間がどうなったとか、何にも書かれていないですよ。

酒井 まったく言及しませんね。『国境の南、太陽の西』の語りで、非常に不審な語りになっている部分ですね。イズミとの現実的な関係性の進展の中での真空地帯のような関係性で、始がまるで夢の中にいるような、リアルな夢を見ているような書き方ですね。

高野 はい。ある種、十七、八歳の、性欲と好奇心で頭がいっぱいな男の子にとっては、願ったりかなったりというか。

酒井 ああ（笑い）。

高野 これ以上ない、っていう感じの女ですよ。あの、とにかく、名まえも無ければ、人格も性格も、……。ただ、一人っ子だったって、……。

酒井 一人っ子っていう、島本さんに重なる共通項はある。でも、それは、セックスした後で聞いてわかったことに過ぎず、イズミの従姉との関係の付録のようなものですね。

高野 はい。なので、ほんとに、先生がおっしゃったように、現実離れしているし、こんなに都合よく、そんな、いくらでもやらせてあげるわよ、私もしたいからって、そんなこと、言う女がどこにいますよ。私は聞きたいです（笑い）。しかも、始は、それでいいんだって、自分は、全然悪くないって、思わせてもらっていますよ。そんな、都合のいい年上の女性なんて、……。これは、いわゆる、そういう年頃の男の子にしてみたら、夢の女性というか、欲望の具現化というか、そんな感じなんじゃないでしょうか。しかも、何にも言わずに、まるで消えて無くなっちゃうんですから。

酒井 イズミの従姉とのこのような関係性は、何のために用意されているのですかね？ 『ダンス・ダンス・ダンス』で書

いているような男性の性欲の形、鳥が空を飛ぶように自然なものである性欲をあからさまに描きたかったのか？ こと、最後の箱根の別荘での島本さんとの性交場面を除くと、始の性的欲望は常に抑圧されていたようですね。現実を生きる人間にとつては、当たり前のことなのですが。小学生のとき、島本さんの家の居間で音楽を聴いていたときにも、中学生になつて、島本さんに会いに行つたときにも、島本さんの母親の視線が気になつて、……。母親が奇妙な目で見ているように感じて、会いに行くのを止めるようになるのですね。

高野 そうですね。

酒井 監視の目というのか、……。まあ、それは始の性欲が作り出した幻影の視線なのでしょうが。

高野 世間体みたいなものを、気にしますよね。

酒井 そうですね。で、高校へ入ると、イズミという、言わば、性道德の規範の体現者に監視され、欲望を押し止められます。大学生のときには、同棲までした女性がいたのですが、その実態は語られていませんね。

高野 ええ。

酒井 だから、誰の視線も意識することなく、抑圧されることなく、イズミの従姉を借りて、男性の性欲っていうものを、春樹が書いたのか、イズミを決定的に傷つけるっていう、ストーリーのためにあるのか。イズミの従姉が、その後、どうなったかについては一切書かないで、イズミが決定的に傷ついたことだけ書く、という非対称性。

高野 はい。

酒井 傷つくイズミを書くための、これは、プロットで、それ以上に意味がないことなのか。イズミが、回復不可能なほど深く傷つくには、それ相応の契機が必要ですね。だから、イズミの従姉との二カ月にわたつての激しい性愛関係を設定した、という考え方……。しかも、それをイズミに隠し通し、それが露見してしまうと、イズミの従姉との関係

は決して本質的なことではないのだから、君を裏切った、というやましさをさえないのだ、とイズミに対して居直りますね。あるいは、もつと単純に考えて、始の青年期の無分別な性交欲求を描くために、イズミの従姉を登場させたのだ、と考えるのか。『ダンス・ダンス・ダンス』の主人公がユキに説明する、鳥が空を飛ぶのが自然なことであるように、男に自然に存在する性欲を描くためのものか、……

高野 先ほどから、何回か話に出ています。男性には性欲があつて、性欲というものは、我慢できないものなんだって、世の中では許容されているというのは、……。それが、真実であるかのように、まかり通っているわけですけど。

酒井 うん。

高野 その、実体というのは、……、男の性欲が、自然とか当然とか、つていわれている言説の、本当の姿は、すごく、醜く、醜悪だし、獣のようなものなんだって、この場面を読むと、感じます。決して、その、空を飛ぶ鳥のようとか、情熱のほとばしりとか、そういう、きれいごとじゃないつていう文脈で、書かれていますよね、ここは。相手の女性、イズミの従姉に対して、彼女の気持を汲み取ろうとか、彼女を理解しようとか、まったく、一切書かれていない。つまり、まったく、人として扱っていないつていうことが、繰り返し繰り返し、書かれているわけですから。

酒井 うん、うん。

高野 先生のおっしゃる様に、男性の肉欲というものを、無邪気に、こういうものです、つて提示しているのではなくつて、その、浅ましさを、つていうか、……

酒井 はい。

高野 これが、男の本能なんです、つて、軽薄に、軽々しく言っているようにいて、実は、……

酒井 うん。

高野

こんなにも、浅ましい、獸的なものなんだっていうふうには、書いていると思います。作品の中で、用いられている言葉は、吸引力とか、しないわけにはいかない、とか、色んな言い方がされていますけど、でも、どんなに言い繕っても、結局は、自己抑制や、忍耐を放棄した、自分勝手な、欲望の発露でしかない。それによって、イズミは、もちろん損なわれたけれども、イズミの従姉もまた、……。あの、始が、彼女も、「僕」と同じ気持だった、相手も肉欲だけしかなくて、相手の始のことになんか、興味がなかったって、決めつけている。その、イズミの従姉を、会葬御礼っていう形で、登場させるっていうのも、いかに非人間的に、扱われたかということ、象徴しているように感じました。男性の欲望、肉欲を、ぶつけられるだけのものとして、女性が扱われるとき、いかに女性が、傷つき、尊厳が損なわれるか。劣情のままに行動し、それを正当化する、男の姿の浅ましさと、それを、引き受けさせられる女性の、人間性の欠如というか。さっきの話の、売買春のこともそうなんですけども、男／女に、つきまとう、セクシャルな関係における、言説と実体の、その乖離の、はなはだしさですよ。だから、ここでは、男でも女でも、それぞれのふるまいの、本当の姿を、春樹は、書いているんだと思います。それは、まさに、自らに対して刃を向ける、ということでもあるのではないのでしょうか。

酒井

ああ。

高野

傷ついたのはイズミだけではなくて、イズミの従姉も、大きく傷ついた。そして、私は、始くん自身も、ひどく、自らを傷つけたと思うんですね。自分の、欲望をここまで露わにすることで。しかも、相手の女性を、ここまで、非人間的に扱ったということ、自覚したことで。ですから、イズミに対しての罪意識は、もちろんあるわけですけど、それだけではなくて、自分の中に、そういう醜悪な部分があるっていう認識が生まれていて、これからずっと、それを、抱えて生きていかねばならない、っていう自己認識は、さっき言った、男性ジェンダーとしての、加害者意識、

共犯者としての自覚というものに、なっているのだと思うんです。

酒井

小学生のときの島本さんとの関係性を初恋っていうんでしょうけど、……

高野

はい。

酒井

しかし、それはまだたわいなものであったのでしょうか、初恋として明確に意識されたガールフレンドはイズミでしょうね。

高野

はい。

酒井

イズミと付き合っていた高校時代、心身両面で劇的に変化していく思春期、この大事な人生の一時期だからこそ、春樹は、詳しく書くんでしょうけれども。始の欲望の形が具体的に描かれるわりには、その対象になるイズミは概念的にしか描かれないですね。イズミの情報をもたらす高校時代の同級生は、イズミのことを、「とくべつ美人というわけじゃない。でもなんとするか、魅力があつた。人の心をかきたてるものがあつた。」と言います。『ノルウェイの森』のハツミさんのような女性として設定されていますね。個性が剥奪されていて、男性の女性幻想を投げ掛けることを可能にする女性像です。そういうイズミから好かれる始を描くことで、春樹は、思春期の自己愛を明確にしているのだと思います。福島章が、『青年期の心』において、「自分のうぬぼれ鏡として愛人を利用することはおおいにありうることである。素敵な異性に愛されることによって、『愛されるに値する自分』を確認することで自己愛的な満足を感じることこそが、この年代の恋愛の、もうひとつの隠された動機である。」と言っています。始の「自己愛的な満足」を描くために、多くの男の子から好意を向けられる、ある意味で、平凡な女の子として設定されているイズミ、だからこそ、始は、イズミへの社交辞令のような褒め言葉を語りますが、心の底からの愛情は持っていないのではないでしょうか。

高野 ええ、そうですね。

酒井 初めてキスした後、どうして、イズミなのだろう、と思った、と言っていて、……

高野 はい。

酒井 キスした相手が島本さんだったら……、などという、イズミの心を踏みにじるようなことを考えています。

高野 ええ。

酒井 キス、それから、裸で抱き合う、というふうには、イズミに対する性的欲求だけはエスカレートさせていくのですが、彼女に対する精神的な愛情が深まるわけではないですね。性的欲求を充たせば充たすほど、イズミへの不満を募らせていくようで、……

高野 はい。

酒井 イズミとキスして、嬉しくないわけがない、と言いつつも、「僕は手放しの幸福感というものを抱くことができなかった」、どうしてイズミとだったのだろう、と思いますね。キスした相手が、島本さんだったら、不安や迷いは一切存在しないのに、って。イズミを裸にし、性交するのだ、というふうには欲望の形が明確になっただけ、しかし、その欲求をイズミによって禁圧される時、彼女への不満を募らせていきます。「想像力に欠けている」、「平板で深みを欠いていた」、「僕を味気ない気持ちにさせた」、というふうには。そして、島本さんが与えてくれたようなものを与えてくれない、と、現実から逃げようとしています。

高野 島本さんと比べるんですよね、それで。

酒井 常にそうなんです。

高野 ええ。

酒井 小学校を卒業すると、自然消滅するように関係性が終わった島本さんと比較するのですね。

高野 島本さんは、「僕」を導いてくれる、知らない世界を、教えてくれるような、……

酒井 うん。

高野 導いてくれる、連れていってくれる、そういう存在でしたよね。

酒井 それは、でも、十二歳のときに感じたことで。

高野 はい、十二歳ですからね、……

酒井 「正確な意味での性欲というものを持たなかった」始の、言ってみれば、まあ、単なる憧れで、少年期の自己中心的な願望を投げ掛けていただけですからね。

高野 ええ。

酒井 思春期の出口にいる高校生の始、今は、「女の子のスカートの下に手を入れることしか頭にない」がさつな男の子になっっている始が、イズミに明確な性的欲望を持っているのに、少女の島本さんに逃げ込もうとして、……

高野 イズミはそれを受け入れてくれないし、島本さんのように、いらっしやい、始くん、こっちに素晴らしいものがあるよ、っていうふうには、許してくれたり、導いてくれたりしませんものね。

酒井 高校生の始が、明確に理解していたわけではないでしょうが、イズミっていう、現実の女は、自分にすべてのものを与えてくれないけど、幻想の女の子である島本さんは、自分の願いをすべて叶えてくれた、と感じるのでしょうかね。

高野 はい。

酒井 現実の女っていうのは、どうして不完全なんだろう、っていうことだろうね。だから、……

高野 私のこと、本当に好き？ とか聞かし（笑い）。

酒井 大人になるにつれて、現実には生きている女には、本当の共感を抱けなくて、幻想の女の影の中に閉じこもっていたのでしょうか、幻想の女じゃなきゃ、だめなんだと（笑い）。それで、島本さんの幻影をだんだん強固にしていき、彼女のイメージをリアルにしていき、常に、島本さんを追い掛け、その幻想に耽るわけでしょうね。

高野 そうですね。とつても小さいときから、あの、島本さんと離れて、会えなくなったところから、いつも、彼女のことを、なつかしく思い出して、「僕は、何度もそのあたたかい記憶によって励まされ、癒されることになった。そして、僕は、長い間、彼女に対して、僕の心の中の特別な部分を空けていた。」「レストランの一番奥の静かな席」っていうふうに、……

酒井 うん、うん。

高野 もう、島本さんに会えなくなっただけ、島本さんの記憶に「僕」は励まされたって、自覚的に言っていますよね。

酒井 それは本当に少女の島本さんなんですね？

高野 でも、そこには、回想する中で、セクシャルなものを、……、あの、そこには、もう、性的なものがあつたと回想しているの、……

酒井 それは、作品の終局間近の箱根の別荘で、島本さんに、「私は十二のときからもう、裸になってあなたと抱き合いたいと思っていたのよ」と言わせて、小学生の島本さんに対する始の性的な欲望、彼女の「ささやかな胸の膨らみ」に視線を向けたり、彼女のスカートを撫ぜる動きから、体の奥に「微かな甘い疼き」を感じたりする性的欲望を、合意されていたもの、許されていたもの、として正当化させていますね。

高野 ええ。

酒井 男の子と、裸になって、抱き合いたいと思っていた、十二歳の女の子がいたなんてことを書くからね、春樹は。

高野 はい。だから、あの、イズミに対しての、「僕」の見かたっていうか、イズミとは、本の話しも音楽の話しもできない、とかつて。

酒井 そうなんだよね。

高野 それは、たぶん、イズミが最終的に、自分の性欲を満足させてくれないっていうことの、苛立ちっていうものの、裏返しでしかなくて、……。本当にイズミと、本の話しや音楽の話しをしたのかというと、そうじゃない。ただ、SEXへの興味だけだったと思います。それを、受けいれてくれない、イズミへの不満が溜まっていった。そして、そういう自分の劣情を、恥じるのではなくて、イズミじゃなくて、島本さんだったら、きっと、自分の気持ちをわかってくれて、そして、……。っていうふうに、転換していくんだと思います。さっき、先生がおっしゃいましたけど、始が見ているのは、イズミという、本当に現実に生きていて、「この人、私のこと、本当に好きかしら？」って、心配になったり、始くんのために、可愛い下着を付けていたりする、そういうイズミではなくて。

酒井 うん。

高野 始くんは、自分の、性欲を受け止めてくれる身体としての女、しかも、島本さんのように、「僕」をわかってくれて、励ましてくれる、癒してくれる女、を求めている、でも、イズミはそうじゃない、っていうことなんだと思います。だから、自己愛というか、自分に都合のいいイズミ求めているので、目の前にいるイズミが、そういう女性像と合致しない言動をするたびに、こんなんじゃない、って、思ってしまう。十七歳のときの、「僕」が求めているのは、あくまでも、身体としての女性、快樂でしかないんだって、いうことだと思います。それを、いくら、理屈をこねて、綺麗な言葉で語ってみたとしても、性欲と好奇心で頭がいっぱいだった男の子が、それをイズミに要求して、果たされない、イズミの従姉という、夢の女性を造形し、呼び寄せた。そして、二人とも傷つけ、自分も損なわれた。そう

いう、欲望に支配され、それを正当化してきた、ということでしょうかと思います。

酒井 だから、目の前のイズミの中には、いつまでたっても、自分のためのものが発見できない。

高野 はい。

酒井 その一方で、十二歳のままの島本さん、ということとは、現実にいる生身の女性ではない、始の頭の中にだけいる幻想の女性である島本さんなら、自分が求めているものを与えてくれるはずだ、と考えるのですね。そのような始は、イズミと付き合っていないながら、生身の女の子であるイズミを見ようとしなない、つまり、イズミとの真の人間関係を築くことから逃げていることになると思います。イズミは、今不在の島本さんを幻視する、島本さんの幻影を呼び出す媒介者に過ぎないのでは、とさえ思ってしまう。イズミという現実の女の子は、始の性的接近を可能にする性的身体に過ぎない、だから、彼女から理想的な何かを得られない、ということになるのではないのでしょうか？ ですから、イズミと最初にキスした後でも、真の「幸福感」が得られなかったと言い、自分が求めているものを与えてくれない、イズミが「平板で深みを欠いていた」から、「味気ない気持ち」にさせられたとも言います。

高野 ええ。

酒井 「性的な関係においては最後の段階まで行」けなかったからといって、「平板で深みを欠いていた」などと人格を否定するようなことを言うのは、イソップ童話の「酸っぱいぶどう」みたいで、始の幼稚さを露呈させていますね。イズミと付き合うようになったときには、「人の心を引きつけるような素直な温かさがあった」と賛辞を呈していたのですね。

高野 はい。

酒井 「何かしら人の心を引くものがあった」島本さん、「自然に人の心を引きつけるような素直な温かさがあった」イズ

ミ、彼女たちは、始にとつて理想の女の子であつたはずなのに、イズミだけが、すぐさま、始を「味気ない気持ち」にさせる「平板で深みを欠い」た女の子に転落するのは何故でしょうか。島本さんは、中学に上がるや否や、始の前から消え去ることによつて、始の幻想の中に、十二歳の理想的な女の子のまま存在し続けることができたわけですが、イズミは、「性欲と好奇心で頭がいっぱいになった」始の欲望に曝されていたわけで、その分、イズミの精神性は無視されがちであつたということでしょう。『国境の南、太陽の西』における春樹の女性観は、「女の子のスカートの下に手を入れることしか頭がない」剥き出しの性欲を向けなければ、女の子は理想的な存在であり得るが、その剥き出しの性欲を向けると、理想的な憧れの存在には見えなくなる、というものだと思います。

高野 そうだと思います。

酒井 そう考えますと、箱根の別荘で、島本さんがかき消えた理由もわかりますね。大きく見れば、それまでずっと、幻想の中に閉じ込めていた島本さんを、箱根の別荘で、生身の女性として現実世界に取り出したと言えると思います。そして、剥き出しの性欲を向けたとき、幻想の理想的な女性であつた島本さんは消滅せざるを得なかつたということでしょう。

高野 ええ。

酒井 「正確な意味での性欲を持たなかつた」少年であつた始の前では、女の子は理想的な存在であつたが、セックスしたくて、気が狂いそうという剥き出しの性欲を向けられたイズミは、もはや理想的な女の子ではいられなかつたわけです。その究極的な形が、箱根の別荘における始と島本さんとして描かれているのだと思います。

高野 そう考えると、その、肉体とか、快楽が、男／女の間には、必ず介在してしまうことの、まあ、不幸、……、というか、なんていうか。それによつて、本当には、男／女は、出逢えないということなんでしょうね。あの、誰

が言っていたのかな、ラカンかな、本当の意味で、男と女が、性的に出会うことはないって。だから、十二歳ぐらいで感じた、疼きみたいなのは、いつまでも、自分を温かく励ましてくれるけど、だけど、その、十七、八になった女は、この場合イズミですけど、まるで娼婦のようで、処女性は守るけど、……。あの、計算高く（笑い）、処女性を守りつつ、でも、娼婦のように、これぐらいはやってあげるわ、なんていう感じで。「僕」は、まったく満足しないし、癒されもしないっていう。

酒井 だから、聖母マリア様が、風俗店に現れたみたいな感じですよものね、高校時代のイズミは。

高野 でも、よく、男は、性と聖は同じとか、言いますよね。あの、セクシャルの性と、清い聖とは、裏表みたいなことを。

酒井 「自然に人の心を引きつけるような温かさ」を持っていたイズミというのは、まさに、聖母マリア様で、みんなに微笑を投げかけているような可愛い存在ですね。

高野 連れて歩くと、すごく自慢できるガールフレンドですよ、ほんとに、こう、……

酒井 そのイズミが、始の性交欲求を押し止めて、「ペニスを口に含んで、舌を動かしてくれた」というのは、まさに、……

高野 娼婦ですよ。

酒井 大学生の緑だって、そこまではしていないでしょう、ワタナベに。

高野 ええ。この書き方は、極端で、二面性をわざと強調していますよね。性的な欲望を向けられて、それに応えようとする女の姿は、決して美しいものではないですね。

酒井 現実での男／女関係の不可能性ということは、後で話すことになると思いますが。イズミとの関係性を見て言えることは、男を女に接近させるのも性的欲望なら、男／女関係を困難にさせるものもまた性的欲望だということだと思

います。高校時代のイズミに強引に接近するのも、箱根の別荘に島本さんと行くのも、性交したくて気が狂いそうという性的欲求からですね。そうすると、理想的な女性存在は始の前から消滅します。十二歳の始の前にいた島本さんだけが、始の幻想の中に存在し続けることで、理想の女性であり続けたわけですね。このような女性観を持っている春樹が、十二歳の島本さんと、三十七歳の島本さんの合成像のような有紀子を描くのは、ある意味では当然ですね。